

信者と同じレベルに立つ法王

昨年3月、現法王フランチェスコの就任以来、カソリックの改革は着実に歩みを進めている。現法王は、教会を華美にしないで質素なものにして、貧しい者が出入りしやすい、構えないで、全ての人を歓迎する教会にしようとしている。また、色々の会合の後でも、今までは毎週水曜日の一般謁見の終わった後に、以前の法王たちは、客人に挨拶して回ったが、一般信者の所にはほとんど回って行かなかった。それが今は全く変わっている。現法王は謁見の話が終わると、車に乗り、端から端へと周り、子供たちが居れば、その頭をなでたり、身体の一部を触ったりして、参集した信者たちを喜ばせている。あるいは自分のかぶっている法王用の帽子を信者のかぶっている帽子と交換したりしている。

日曜日や祭日には、法王は宮殿の窓から顔を出して、サンピエトロ広場に集った信者に対して話しかける。その内容が簡単明瞭で、誰にも分るように考えられている。そんなところから一般信徒からの人気も高まり、毎回10万人以上の人を集め、サンピエトロ広場だけでなく周辺の道も、人で埋め尽くされる。

今までの法王の話には、聖書からの引用が多く、キリストの事跡を論ずるものが多かったが、現法王は、引用も少なく、人々の日常生活に対処する内容のことが語られる。アンジェルスの話は12時から始まって30分程度で終わるので、法王は終わりに「もう昼食の時間だ。皆、美味しく沢山召し上がれ」と語り、終了する。

また、いろいろな機会での話でも、今までの法王たちとは違い、聞いていて、ドキッとすることもある。話の内容によっては、今まで私が天理教の教会で聞いたような内容のものが話され、驚くことがよくある。こちらで長年生活していて、多くのキリスト教徒と接して来た。彼らに天理教の話をよくして来たが、「カソリックの話と同じだ。または良く似ている」と言われたり、「天理教の教祖はカソリックを勉強したのか」とよく言われたものだ。そこで、今私は「現法王は天理教を勉強したのか」と問いたい。

例えば、2013年12月15日のアンジェルス。「教会は聖なる場所であるが、皆が喜ぶべき場所でもある。教会へ来て悲しんではいけない。教会は悲しんでいる人たちの避難場所ではない。教会はまさに喜びの家なのである」と述べた。ちょうどその時は雨が降っていた。法王は「雨の中、私の話を聞かせて申し訳ない。皆さんは勇気がある。神のたすけによって我々はいつでも始めから物事をなすことが出来る。寂しさを克服し、新しい歌に調子を合わせることもできる」「クリスマスに飾るプレゼーピのキリストに祈る時には、一緒に私のことも祈って欲しい。私は何時も君たちのことを思っているのだから」と話す。

教会の門を開こう

教会の神父は、信者たちを上から下に見下すような態度をとるべきではない。神父は「権力」を持っているのではなく、人々の「僕」である。神父であることは、遠くにいる人たちのことも気に掛けなければならない。彼らも、神から、神父に任せられたのである。

ローマ法王は2013年12月31日、サンピエトロ教会において、ローマの問題について述べた。「ローマの美しさは世界唯一で、確かなものである。環境、文化、芸術の豊かさと苦しみを感じずる社会的不便さとの間に大変なコントラストを感じる。」「多くの旅行者がいると共に、また多くの亡命者もいるのだ。こういう人たちも同等に扱われて当然。働いている人は多いが、また働いていな

い人も多い。一生懸命働いても、それ相応のお金を貰えない人も多い。精神的、文化的財産は格別だ。逆に、物質の欠乏、物質的・道徳的貧しさを背負い込み苦しんでいる人も多い。そういう人を教会は受け入れて行こう。」

イタリア司教会議での話

法王は命をもっと大切にしようとして訴えている。生命をしっかり守り、育てることは未来を切り開いて行くという。母親の胎内にいる時から、子供は明日を見つめている。創造者の協力者となり、男としての、女としての責任感をまっとうするのである。子供というのは両親を見て、周囲の大人を見て、生き方を習う。一人ひとりの子は「命を愛する神の顔」を持っている。それは家族への、社会への贈り物である。今日のような危機の時代でも、生命を創ることは未来を創りだすことだ。社会はどのような文明形態、文化形態を選ぶのか。そこに「邂逅の文化」が必要になって来る。それは世代間による対話である。それは若者の聡明さと労苦と、高齢者の持つ経験と強靭さを融合することである。

近年先進国、例えばイタリアのように、新生児の数の減少というよりも妊娠させないということは非常に憂慮すべきことである。我々の社会は今日、堅固さ、責任感を持って生活し、いずれは父として、母としての任務を遂行する男女を必要とし、それが現在の人口減少問題を乗り換える。安定した将来を想像することは、確固たる意思と愛と援護の高度な関係を必要としている。高齢者や子供、若者を考慮しない民族には明日はない。

貧困と病

2013年11月9日謁見の後で、法王は参列した、600台の手押し車に乗り6列に並んでいる病人や身体障害者の間を周り、一人ひとりに声を掛け、身体の一部を撫ぜ、握手をして回った。そのために3時間程かかった。この日は全イタリアからUNITALSIの創立110周年を記念して、6,000人がローマに集まり、ローマ法王を取り囲んだ。そのうち1,500人が病人であり、そのうち600人が車椅子を使い、法王の特別な恩寵を受けた。法王が一人ひとりに会うのは、宝石を持つことよりも貴重であり、注意を彼らに向けられることは至福であるという。

病人、障害者であることは、教会にとって貴重な宝である。そのことを恥じてはいけぬ。多くの人たちはその話を聞いて大喜びした。握手をする者や法王の腕の中に飛び込む者など喜び方は一人ひとり違った。中には、自分のことを語る者、贈り物をする者、祝福すべきロザリオや手紙を渡す者もいた。この日は苦しみの世界にいる者と神の代理人法王との邂逅である。これは、また病める者と法王との提携契約の更新である。

さらには、「皆さん、マリアの母性愛を真似しよう。カナの結婚式の奇跡を思い起こそう。イエスの言うことは何でもしよう。マリアは弟子たちに、キリストが言ったことを、直ぐに実行することを命じた。弟子たちは、水を汲んで、カメを満たした。すると、水が酒になった。それまで仕えてきて、最高の結果を得ることが出来たのだ。このことは、師に従ったマリアが人に対して、母として最高の事柄を教えているのである。最後にローマ法王はUNITALSIの会長に向かって、「次回は大きな汽車を用意しよう。全イタリア人がそれに乗ってルルドに行き、奇跡を得て、全員よくなって戻って来ましょう」と述べた。